働きによらない賃金

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原口, 尚彰 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24749

「働きによらない賃金」

総合人文学科長　原口尚彰

マタイによる福音書、第二〇章一～一六節

1「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。2主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。3また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、4『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。5それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。6五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、7彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。8夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。9そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。10最初に雇われた人たちが来て、もっ

と多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。11それで、受け取ると、主人に不平を言った。12『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。』13主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。14自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。15自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』16このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

新約聖書に収録されているイエスの喩え話の中には、人間社会の常識とは一見かけ離れたようなものがあり、一体何を言おうとしているのか、よく考えて見なければ分からないようなものがありますが、実は、その一つが、今読んだぶどう園の労働者の喩えです。近年、講談社の現代新書の一つとして出版されて、ベストセラーになった橋爪大三郎・大澤真幸著『ふしぎなキリスト教』という書物も、この話を「不可解なたとえ話」の一つとして槍玉に挙げています（二二〇―二二二頁を参照）。話の結末が世の常識からはあまりにもかけはなれているので、著者の社会学者

たちは、聖書の中でイエスが時々間違ったことを言うことの例証とすら考えたのです。

問題の喩え話は以下のような内容です。あるぶどう園の所有者が、夜明け前と朝九時と一二時と午後三時と五時という具合に、全く違った時刻に日雇いの労働者を雇い、一日一デナリオンの報酬を払うという約束で働かせました（マタイ二〇・一―七）。一日の仕事が終わり、賃金の支払いの時になり、その日の賃金が所有者から個々の日雇い労働者に手渡されました。所有者は各自が実際に働いた労働時間に関わりなく、一律に一デナリを個々の労働者に支払いました（二〇・八―九）。すると、朝から一日中働いた労働者は、夕方の五時に雇われて一時間しか働かなかった者と同じ金額しか貰えなかったことが不満で、所有者に強く不平を言いました（二〇・一〇―一二）。それに対して、所有者は労働の対価として一デナリ支払うというのは当初の約束通りだ、また、主人の他の労働者に対する気前良さを妬んではいけないと言って労働者の不平を退けてしまいました（二〇・一三―一五）。

社会生活の常識は、働きに応じて報酬を受けるということで、そのことは普通の人が抱く正義感に適っています。長時間働いた者は、短時間しか働かなかった者よりも、労働時間に応じて多くの報酬を受けるというのが、通常ならば公平であると感じられるからです。もし、一生懸命に長時間働いた者も、ごく短時間しか働かなかった者も同じ扱いを受けたら、労苦を惜しまず真面

目に働く者が社会からいなくなってしまうでしょう。旧約聖書の箴言は社会生活に関する格言を集めた書物ですが、民衆が抱く正義感に適う応報原理に従って、一生懸命働く者はその報いとして豊かになり、怠け者は貧しくなると言って、勤勉に働くことを勧めています。例えば、箴言一〇章四節後半は、「勤勉な人の手は富をもたらす」と述べ、二〇章四節は、「怠け者は冬になっても耕さず、刈り入れ時に求めるが何もない」と言っています。

ぶどう園の労働者の喩え話の作者であるイエスもユダヤ人であり、勿論、このようなユダヤの人々の間に勤勉の美徳を説く常識的な考え方があるということが良く分かった上で、敢えて挑発的に、この喩え話を語ったのではないかと思います。この話は、冒頭の句が示しているように、「天の国」についての喩えであり、ぶどう園の主人は神を表し、ぶどう園の労働者は神に仕える信徒のことを言っています。一日の労働の後に支払われる賃金は、世の終わりの時に一人一人の信徒に約束されている究極的救いということを表していると思われます。そうすると、この喩え話は、「天の国に入る」、もしくは、人が究極的に救われるということに関しては、人間の社会生活上の常識では十分に理解できない部分があるということを強調していることになります。少し言葉を換えて言えば、人間の究極的な救いということは、人間の側が何か良いことをした報いとして与えられるのではなく、神の側の一方的な恵みとして与えられるということです。そこには働きと

報酬の均衡という原理は該当しません。若い時から神を信じ、その教えに従う生活を心掛けて生きてきた人も、一生の大半を神とは無縁な生活を送っていたけれども、人生の終わり近くになって、悔い改めて神に立ち返り、信じるようになった人も、神が与える罪の赦しや救いということに関しては全く同じであるということを、この喩え話は言おうとしているのではないかと思います。この喩え話は、人間の救いということに関して神は吝嗇ではなく、非常に気前が良く、誰でも何時でも神に立ち返る者には等しく救いを与え給うということを人々の意表を突いた形で、印象的に語ったということになります。

イエスの喩え話は、当時のユダヤ人の庶民の身近な日常生活から題材を得ていますが、その内容は、当時の社会の常識とはしばしばかけ離れており、私たちに人間について、また、神への信仰について新に考え直すように促しています。信仰というのは、既成の答えに満足するのではなく、常に新に自分で発見することの連続であり、イエスの問いは私たちに自分で考え、新しい発見をするように促しているのであります。聖書を読むことは、世界と人生について、新たな驚きを感じ、新たな意味の発見をする営みなのです。